

## 愛と哀しみに さすらい シューベルト

——私は何人もの兄弟姉妹と共に

に優しい両親の暖かい愛情に包まれて育った。そんなある日私達は父に連れられてピクニックに行った。みんなが楽しそうなかで私だけ悲しく沈んでいると、父親がやって来て弁当を食べなさいと言った。食べるような気分になれない私を見て、父は烈火のごとく怒った。

私は逃げるようにして遠い土地に旅に出る。誰にも理解されぬ溢れんばかりの深い愛情を心に秘めながら……。何年もの間、この不毛の愛のやるせない苦痛が私をさいなめる。

そこに母の死の知らせが届いた。私はすぐさま家に戻る。母の遺体を目のあたりにして、涙がとめどもなく流れた。過ぎ去った幸福な日々そのままの姿で、母は横たわっている。

ある日父親が私を自分の庭に連れて行き「気に入ったか？」と聞く。小さな声で「いいえ」と答えた私は、父親に殴られ逃げる。

胸に報いられることのない愛を秘めながら、再び私は流浪の旅に出た。何年も何年も私は愛の歌を歌い続ける。愛の歌を歌うと心が痛み、苦悩を歌に託すと心には愛が溢れてくる。こうして私は愛と苦しみとに身を裂かれるのであった——

これはシューベルトが25才の時書き残した「私の夢」という小文の要約である。この年シューベルトは有名な「未完成交響曲」や「さすらい人幻想曲」を作曲しているが、2年前にうつされた梅毒の症状がかなり昂進した時期でもあった。

病院に入院する程の重症で、病氣特有の湿疹の治療のために髪の毛は全部刈られてしまい、毛が生えるまではかつらをかぶって他人にはほとんど会わなかったらしい。

入院中には重度の鬱病にもなり、「未完成交響曲」が未完のまま終わったのもこの鬱病が原因だろう、という説も存在する。

それはさておき、この「私の夢」にはシューベルトの音楽をより深く理解するための助けとなる、大切なキーポイントが隠されている。

まずは「愛する人間から遠く離れてあてもなく漂泊する」シューベルトの心情。安住の地を求め

ながらも裏切られ、ついには死の中にのみ唯一の慰いをみいだしてそこに我が身を委ねんとする孤独感には「美しき水車小屋の娘」「冬の旅」や「さすらい人幻想曲」第2楽章の冒頭にも使用されている歌曲「さすらい人」などの歌詞と音調に、はつきりと表れている。

そして「愛情と苦悩は紙一重」という達見。「幸福な歌を歌えば歌うほど苦しくなり、逆に悲しい歌を歌うと心が和んでくる」という言葉は、あまりにも人間的である。シューベルトの作品を演奏していると、他の作曲家の作品には決して見受けられない独特な転調や、長調と短調の混沌とした様にとまどうことがあるが、それらはシューベルトの心の高揚や失望、期待、あきらめその他さまざまな感情が飾られることなく、正直に表現されているのである。

シューベルトが神のように尊敬し、葬儀の際には松明たいまつを持って棺に連れ添った程のベートーヴェンの「運命に打ち勝って歓喜に至る」といった強い意志は、シューベルトの音楽にはうかがえない。

しかし内気なシューベルトが音楽に託した、他人には打ち明けられなかったたくさんの思いに耳を傾けてみよう。

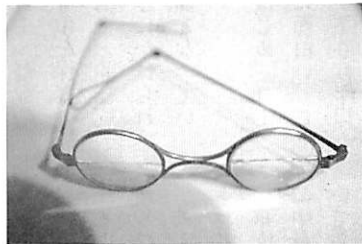
「ボク、ルックスあんまり冴え



シューベルトの最後の住居にあるシューベルトが使ったピアノ(ケッテンブリュッケンガッセ)



シューベルトが通ったレストラン「ツェー・デン・ドライ・ハッケン」(ジンガーシュトラッセ)



生家に展示されているシューベルトの眼鏡



シューベルトの生家にある肖像



シューベルトが「未完成交響曲」を書いた家(シュビーゲルガッセ)

ないんだ、チビで前かがみで近視だし。それに結婚適齢期にはウィーンの飲みすぎて、それまでただでさえも『しつかりした体格なってるのね』と言われてたのが、とうとう真正正銘のデブになっちゃったからね、まあ片思いばかりでも仕方ないか。ああ、胸の内にはこんなにも激しい情熱がたぎって

いるのに……」ぐらいの訴えが聞こえてはこないだろうか。  
その当方で約30万人(一説によるとその倍ともいう)、そのうち城壁の内側の2平方キロメートルにも満たない程の土地に、なんと6万7千もの人が住んでいたと言うウィーンには、常に数え切れない

程の音楽家が集まっていた。その中でシューベルトはウィーンに生まれ、育ち、住み、そして亡くなったウィーン生粋の作曲家である。シューベルト生前の希望通り、その遺骸はベートーヴェンの隣に埋葬されているが、そこから飾られる花の絶えることは、これからも決してないだろう。